きょうの発言

贈り物

今年もいよいよお中元、ギフトシーズンが始まった。親しい人やお世話になった人に贈り物をする習慣はいつから始まったのだろう。

中国の古典には、たぐいまれな玉石を王に献上しながら、にせ物と疑われて足切りの刑に遭った人の話や、自らの首をはねて恨みを持つ王にそれを届けることで王の油断を招き、命を狙おうとするなど物騒な話が数多く出てくる。兼好法師は、よき友とは物くるる人と言っているし、現代の若者は、ガールフレンドへのプレゼントを買うためにティファニーの売り場にかけつける。

丸谷才一氏の最近のベストセラー「女ざかり」のキーワードが贈り物というのも、人間関係が希薄になった今日、何かうなずけるものがある。

こうしてみると、古今東西、贈り物は人間同士のコミュニケーションの手段として、大いに活用されてきたと言えそうである。しかしながら、贈り物ブームの時代に、これだけは遠慮してもらいたいというのが贈収賄だ。衆議院選挙で政治改革が争点になったのも、本をただせば、政治に金がかかりすぎること。献金という贈り物をして、見返りに利益、便益を受ける。不透明な部分にうさんくささを感じてしまう。

江戸時代、庶民の主婦は、贈り物に手縫いのぞうきんと竹で作った箸（はし）を持参したという。高価ではないが、心のこもった品物だ。今度の総選挙では、日本の将来を託せるクリーンな政治家に、心をこめて一票を投じたいと思う。それが、二十一世紀の日本を担う子供たちへの責任ある贈り物というものであろう。

亀井創太郎（亀井通産社長）